

## 第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」⑤

元おやさと研究所長  
井上 昭夫 Akio Inoue

## 第5節 「萃点」と「頂点」のマングラ試論

「ぢば」の理を受けて、地方教会で「つとめ」をおこなうのは、南方曼荼羅に象徴される「萃点」移動にほかならないとわたくしは考える。天理教立教の原点として『みかぐらうた』第四節において「このところやまのぢばのかみがたと いうていれどももとしらぬ」とうたい踊られる「このところ」は不動な「元の屋敷」としての地点であるが、「このところ」から発せられる「天の理」は、「存在」それ自体であり、始原からこの宇宙を満たし、その理不思議は時空間を超えて人間・自然をふくむ宇宙全域に超複雑な因果と因縁をまきこみながら移動、拡散しつつけている。その核心は「元の理」は「今の理」であるとする思想にも通底している。

「あんだ、富士山を知っていますか。頂上は一つやけれども、登る道は幾筋もあります。どの道通って来るのも同じやで。」という『逸話篇』108の言葉は、天理玉命の裏守護の道筋を暗示肯定されたお言葉であると解釈されている。頂上は一つだけれども、その一つの「ところ」には、すべての信仰が包摂されている。つまり「天の理」は各宗教がそれぞれの「萃点」として配する道筋の諸「萃点」の「萃点」の頂点でもあると解される。富士山の頂点を、「元の理」曼荼羅の円錐状的「萃点」と見立てた場合、頂点から360度を可視できる「萃点」にいたる底辺下界からの無数のたすけを求める道筋、つまり因果律、偶然、因縁などの諸不思議の交接によって生起した諸「事」的存在形態について、わたくしは次のような「登る道筋」(陽気遊山)の空間モデル図をリーマン幾何学を念頭に考えたことがある。詳しくは拙著の図面解説『中山みき「元の理」を読み解く』の第3節「宗教多元論の解釈—教祖伝逸話篇「登る道は幾筋も」を手がかりとして」(391～427頁)を参照いただきたいが、ここでは「見たて」として富士山頂上への登山の道筋をあえて単純化するために直線型上昇モデルとして、信仰の登山への喩から見えてきた頂点への道筋の超複雑な姿を、(1)立体側面図、(2)平面透視図、(3)直線型、(4)湾曲型、(5)円周型、(6)周転円型、(7)直進登頂図、(8)彎曲登頂図、(9)湾直登頂図、(10)直湾登頂図、(11)直周回路図、(12)湾周回路図にまとめ、くわえて修験道の前行、峰入、峰中、出峰を、(13)入神前型図、(14)入信後型図、(15)垂直伝道能型図、(16)水平布教態型図にモデル化した。各登山者(求道者)の頂点に至る筋道だけではなく、あらゆる「物」を「心」が「事」化した信仰者個人の歩んだ熊楠の曼荼羅の複雑な筋道が、この中のいずれかの複数パターンを複合的な形におさまるであろう。全体を立体的に組み立てれば、ひとつの「にほん」の天理マングラの筋道が、物不思議、心不思議、事不思議、理不思議を織り込んでそのすがたをあらわすと予感される。いずれも登山口までの道筋は、現今のクラブツーリズムの「富士山すそ野一周ウォーク」に象徴されるように、大地をほぼ水平に走っているが、たどり着いた山門から登頂への山道は垂直・螺旋を描き頂上を志向している。上昇螺旋形を描く通常の登山道、つまり周回路は、登山者に登山の楽しみと意外性をその道半ばにおいて与える。ロッククライミングに見られる直進登頂型は、周回路登頂型より高度な技術と自然環境の変化に対応した的確な判断力と勇気が求められる。頂点を極めた瞬間の「悟り」の体験は、前者はそれが徐々にやってくる可能性を予感として持ちうるが、初体験者としての後者は登頂までの緊迫性が前者に比べてはるかに厳しいため、前者のような精神的余裕はない。各自が持つ求道スタイルは、登頂のさまざまな「かたち」、例えば修験道の山岳修行、ラマ教の五体投地などの修行や聖地を訪れる緒宗教的巡礼にも取斂されるであろう。その複雑きわまりない道筋を抽象化し、モデル化したのが「登る道筋」(陽気遊山)の空間モデル図である。拙著においては、国宝「富士山参詣曼荼羅図」をはじめとして、山岳信仰の原型的象徴としてあった『富士山の文学』(久保田淳)や三原典にみられる教語「道筋」の解説にくわえて、「往生記」や「五重相伝」と「別席」制度、「二河白道」と『おふで

さき』から、イラクのサマラの国境寺院の(螺旋上昇する)尖塔、19世紀にキリスト教大衆信者のなかに浸透していった「The Ladder of Fortune」(幸運の梯子)や「The Way of Good and Evil」(善と悪の道筋)の上昇的曼荼羅表現との類似性についても裏守護見立ての関連モデルとして指摘している。くわえて宗教文化人類学視点からは、A. ヘネップの通過儀礼論やV. ターナーの巡礼論を論じている「巡礼」の定義と構造(井上昭洋「おぢば帰り」の巡礼論)『《伝道参考シリーズXXIV》現代社会と天理教』おやさと研究所、2013)も援用できるであろう。

さて、教祖は内山永久寺の修験者十二先達の市兵衛の道場で、49日(一説には90日間)もお籠もりをしていたという注目すべき記録がある(『復元』30号、17頁)。立教の元一日において、時前の1年間に秀司の足痛の寄加持が9度も繰り返された。10度目は秀司の足痛、善兵衛は眼、みきは腰と3人揃っての悩みとなった。そこで市兵衛に寄加持を依頼。しかし、いつも加持台に立つそよが不在であったので、市兵衛はみきに御幣を持たせ、一心にこめての祈祷の最中に、「みきを神のやしろに貰いたい」との啓示となったと伝えられている。問題はなぜ腰痛のみきにあえて加持台に立たせて御幣を持たせたかである。わたくしは加持台そよの不在は偶然ではなく親神のなせる必然の業であって、旬刻限の到来と共に教祖がその魂の因縁によって立教の役割を果たされるよう、市兵衛の道場に49日間もお籠もり修行をされたと推測している。この長期間のみきのお籠もりの修験道修業についての詳細については、「五重相伝」のような文献が見当たらないのは残念である。

時は陽明学的「天道思想」を背景に実践された大塩平八郎挙兵の惨めな敗北に象徴される幕末の未曾有の混乱期が続いており、天災地変も加わった生地獄の様相があちこちで現れた時代であった。あの世に極楽浄土を求める貧民が村落単位で頻出し、改革を求める暴動がさまざまな形で勃発した。このような末法的な時代にあって、現世に極楽浄土があるのだという『みかぐらうた』の思想が発動し、出直しの教理を「かしもの・かりもの」の心身論を通して、病の根は心にある、欲を忘れてひのきしん、世界は一列きょうだい、夫婦が地天に対応する社会生活の基盤であり、「世直し」ではなく、「世直り」が本来の世界の治まりとなる、といったあらたな教えが『みかぐらうた』に詠われたのである。わたくしには「五重相伝」を終えられた19歳より立教(天啓)までの22年間は、教祖が「裏守護」の教えの勉強研究とその実践活動をおこなわれた期間ではなかったかと考えている。もちろん、浄土宗の日常のおつとめに唱えられる「四誓偈」に法然の遺書である「一枚起請文」や、浄土三部経の阿弥陀仏出現の由来を明かす『無量寿経』、極楽浄土の荘厳な世界を活写する『阿弥陀経』や極楽往生するための実践法を説く『観無量寿経』についても、12、13歳にして、ほとんどの經典の趣旨は理解し、19歳で「五重相伝」を受戒し、さらに仏門における講話聴聞などの面授を通し、いわゆる裏守護の知識を深められたと伝承される。「元の理」における人間完成への「文字の仕込み」に先立つ「知恵の仕込み」は、立教以前に伏せ込まれていたことを忘れてはならない。

以上のような次第で、立教以前の貧者への施しなどによる教祖の慈悲あふれる行為に重点がおかれるあまり、合理的・普遍的な「知恵の仕込み」による「元の理」に沿った象徴的な「最後の教え」の「裏守護」的側面の研鑽と実践の歴史的研究が見落とされる感じを持っているのはわたくしだけであろうか。「五重相伝」受戒後、立教まで22年間にわたる「裏守護」の道を通られた教祖の知的側面研究重視への気づきの不在は、天理実践教学の誕生を阻害しているようにも思われる。このことは、南方熊楠の曼荼羅を凝視している内に、「最後の教え」と教えられる天理教学が普遍の世界思想に交接し得ない重要な要因のひとつになっているのではないかとわたくしには思われてきた。「理不思議」をあらわにする「事」的天理実践教学の重要性に目覚める「ふでとりがくにん」の誕生が期待されるゆえんである。